廣讃寺ジャーナル

第 4 号
(発行所)
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

おぼん・そして八月十五日

遠い遠い異国から
ガダルカナルから浄国さんが
サイパンからは敏ちゃんが
フィリッピンからは兄ちゃんが
勉強のよくできた安ちゃんは
ミッドウェイの深い海から
みんなみんな帰ってくる
そして近くのすぐそこから
熱田空襲の白鳥橋から
動員学徒十七才の弟が帰ってくる
稲葉地に焼夷弾が降った
十一才の錦ちゃんは庭の防空壕でお母さんが燃える
焼夷弾をとってあげたがまにあわなかった
この日恵ちゃんは母ちゃんにおんぶしてもらって
火の海の中を逃げた　弾が恵ちゃんをかすめた
気づいた時恵ちゃんはつめたかった
皆がいった　恵ちゃんはお母さんの身がわりになったと
一才にもなってない恵ちゃんも帰ってくる
そしてみんなで
戦争はやめようネ と

納涼大会の様子　　7月20日

聖人のおことば

弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば
　ひとへに親鸞一人がためなりけり

聖人がつねひごろ、あう人ごとに呼びかけてみえた一句である。

人間は勝手なものだ。

いいことがあればよかったよかった、おれは毎日精を出し頑張っている。これくらいのことがあっても当たり前だと反り返る。わるいことが次にやってくるとする。こんなはずではない。だれかかれか、あいつが悪いからだと他人に原因をなすりつけたり、社会が悪いからだと世をのろってみたりする。

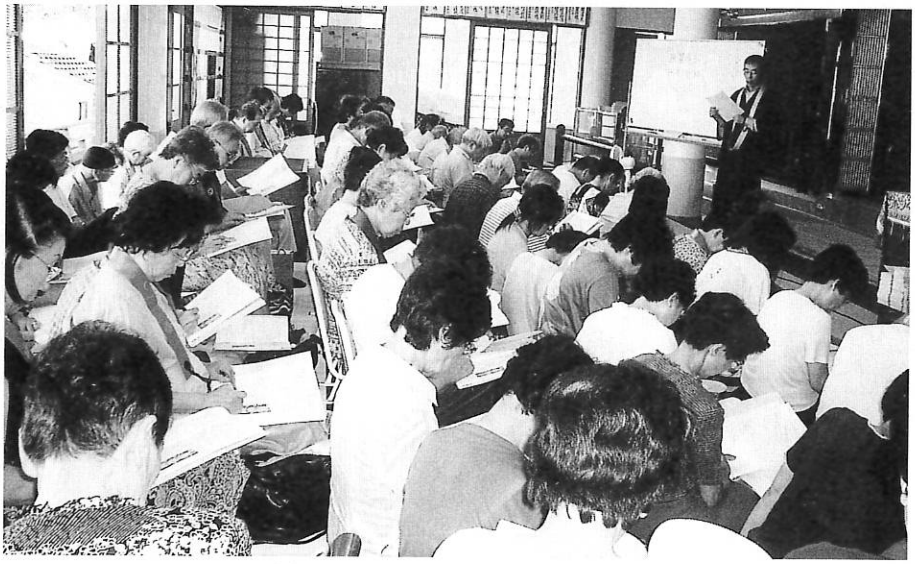
いいことがあるのは自分にそれだけの才能があるからと自負し、悪いことがやってくると他人が悪いからとか社会が原因だと決めつけるのは虫がよすぎる。この世の出来事はなんでもかんでも、ふりかかるままに生きていくことこそ肝要である。

災難から逃れたいのは誰しも同じである。だから平素の用心・準備は怠るべきではない。それ以上の心配はとりこし苦労というものだ。

仏様が極楽浄土をつくり、念仏をとなえるだけでいいよといっとって下さる。

こんな分かりやすいことはない。これほど実行しやすい事はない。かくも、かみくだいて教えて下さっているのは凡夫の私にこそ教えんがためと受けとめることだ。〃私一人がために〃の尺度ですべてを観察したいものだ。

仏に遇うことはむつかしい。仏と会話することはなお



ご命日のつどい　7月12日

むつかしい。むつかしい故に仏はないと決めつけるわけにはいかぬ。

春ともなれば万物めぐみ、秋ともなれば全山紅葉する。冬の暁は厳しく、夏の宵は心解放（とか）れる。

今夏は猛暑らしい。一日一日納得の日を過ごすことだ。

巨木

巨木は今日も悠然とかまえている。

往古の日本列島に繁茂していた照葉樹林はかくやと思われる。

母屋一面に広がっている枝葉は常に天空の風になびいている。楠葉独特のサラサラとした音をたてている。

同級生の宅でもあってこの巨木との付きあいは八十年にもなる。根回りは五㍍ほどか、さだかではない。そうした詮索（せんさく）よりもその風格にひかれる。

見上げるといつもそこには鳥の声がしていた。平成の鳥は嫌われものになっているが、大正の子供にとっては鳥は友達であり、童謡の主人公でもある。なんとかして上空に昇り青葉若葉にゆらぐ鳥の巣を見とどけたいといった夢は今も消えることはない。

名古屋別院奉仕研修に参加して

五月二十九日　午前十時から午後四時までの行事に参加した。

「お墓は何のためにあるのか」

「葬儀のあり方」

の二題のお話であった。

「お墓とは南無阿弥陀仏で一生を終えた私たち一族の報恩塔である。葬儀よりも稱名にはげむのが真宗のあり方である」

自分なりに納得する一日であった。

（都三）

稚児募集

廣讃寺
親鸞聖人七百五拾回
御遠忌(待)法要

十一月三日　午後一時

～仏の子として　わが子を
かざり　育てましょう

※八月案内

八月　九　日(土)　同朋委員会・例　会
八月十三日(水)～十六日(土)　お盆
八月二十二日(金)　茶・おとき　研究会
八月二十五日(月)　学習会
八月二十八日(木)　二十八日講・女人講